

説教題：神に対して生きる者

聖書：ローマ6章1～11節＜口語訳＞

新約聖書239～240頁

ローマ6章1～11節＜新共同訳＞

新約聖書280～281頁

ローマ6章1～11節＜新改訳第3版＞

新約聖書297～298頁

ローマ6章1～11節＜塚本訳＞

新約聖書471～472頁

(全節を朗読)

主題：主イエス様から賜った聖霊の導き
によって主の弟子たちは、主の名
による神の罪からの救いを宣べ
伝えたように、私たちも、福音を
伝えたい。

序論；

◇**ローマ書**は、**神による人間の罪からの救い**が、**どのようなにもたらされるのか**を**使徒パウロ**が語っている書簡です。

⇒ケンクレヤのフィベが商用でローマに赴くことを聞いた**パウロ**が、コリントで**ローマ書**を認め、彼に託したものとされています。

⇒**パウロ自身**は、コリントから**ローマ**へ伝道に行きたかったようですが、諸教会からの献金をエルサレム教会に届ける役目を担っていたので、エルサレム帰還を優先し、その後で**ローマ**へ伝道旅行をと思ったようです。

⇒**パウロの計画**の通りではありませんでしたが、この第3回の伝道旅行が終わった後、最後の旅は、捕囚の身ながら**ローマ**へと導かれるのです。

◇**ローマ書6章1～11節**は、**ローマ書5章20節**の「**塚本訳 律法は、過ちを増し強めるために第二義的に来たのである。しかし(神に感謝する、人の犯す)罪が増し強まれば、恩恵は豊かにあふれる**」の誤解を解くために書かれた箇所とされています。

本論；

◇本日は、**主の復活日礼拝式**にあたり、**ローマ書6章1～11節**からの**使信**に心をとめます。

◆**ローマ6章1～7節**；**神の義**は、**キリスト・イエス様**の死に**合わされる**ことです。

◇**1～2節**；「**アダムによる原罪**」をパウロは、示し(3:19-20)、永遠のいのちの賜物を与える「**神の義**」(5:21)を提示してきました。

⇒今、**パウロ**の提示に無知な人々が、**罪の奴隷**生活にとどまって、**神の恵み**だけ一杯受けようとしていることに気づき、**罪にとどまるべきではない**と、語ります。

◇**3～7節**；**洗礼(バプテスマ)**を実例に取り上げ、①「**死に与かる**」こと(3)、②「**死者の中からのよみがえる**」こと(4)、③「**キリストと一つにされる**」こと(5)、④「**罪の奴隷から解放されている**」こと(6-7)を提示しています。

⇒**パウロ**は、1～14節の間に、「**罪**」を10回、「**死**」とか「**死者**」とか「**滅び**」を16回以上用いています。「**生きる**」とか「**いのち**」の倍以上を使っているのです。

⇒「**死と生**」は、**洗礼**では、同一の出来事でした。

- ⇒パウロは、**洗礼**による**罪との決別・死**が、**神信仰に徹底する鍵**と示し、エバの罪をアダムの罪とする原罪、**自分の罪を問う**のです。
- ⇒**キリスト・イエス様の死と復活**は**不可分離**なのです。
- ⇒**〇〇師**は、「**罪**に対して**死ぬ**こと」から「**死**から**復活**すること」は、不可逆なことであると、語っておられます。後戻りがないのです。
- ⇔可逆性は、水を酸素と水素に分解できますし、酸素と水素から水を合成することができる場合に言える化学的反応です。
- ⇒「**キリスト・イエス様の死と復活**」の関係は、分解と合成を繰り返すものでないように、「**キリスト・イエス様の死と復活**」に合された者も、分解と合成を繰り返さないのです。
- ⇒**7節**；「**塚本訳 死んだ者は罪から解放されるからである**」⇔「**罪の奴隷でなくなる**」(6)のです⇔「**キリストと一つにされ**」(5)、アダムの罪とは決別するのです。
- ⇒「**キリスト・イエス様の死と復活**」に与る**洗礼**は、**罪**に対して**キリスト・イエス様の死**に合される実例だと、**パウロ**は示します。

- ◆ ローマ6章8～11節 ; 神の義は、罪と死に支配されないで、神に対して生きることです。
- ◇ 5節 ; キリスト・イエス様に「つぎ合わされる」は、KK先生の説明では、「ともに成長する」の意味で理解することがよいとされ、「接木」よりも、「一つのいのち」にともに与ってという意味だということです。
- ◇ 8節 ; 「もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる」とパウロは言いますが、罪の中にとどまる「自己」の葬りなしには、「復活のいのち」の中にあって「一つのいのち」に「ともに生きる」ことはできないことです。アダムが罪によってもたらした死は、3つ、①肉体の死、②道徳的倫理的な死、孤独・断絶、③永遠の滅びとしての死で、復活は、この全ての死に勝利します。
- ◇ 9～10節 ; パウロは、神の義の道を示し、「罪人」が生きるのは、「罪と死」に支配されない生活であると啓示するのです。
- ◇ 罪を犯さなくなるということではなく、「キリスト」のいのちに生き、「罪」に決別することです。

◇「**キリストのいのち**」に日々**支配される**のです。

◇**11節**；「**思いなさい**」は、**パウロ**がよく用いる言葉で、「数える、計算する、考慮する、見なす、～に帰する、もくろむ」等の意味です。

⇒このことばは、**4章24節**では、「**認められる**」や「**みなされる**」と訳されています。

⇒基本的には、神が、イエス様をご覧になったことを真実と「お認めになる」ということです。

⇒**私たちが日常的にすべきこと**は、自分の罪を日々主におまかせしたら、罪にこだわることを忘れて、「**キリストのいのち**」・「**神のことば**」に**心を支配されて生きる**ことです。

⇒職場に働く人でしたら、思い煩わないで、与えられた仕事に使命感をもって、あらゆる知恵と工夫をもつてのぞむことです。

⇒家庭の主婦でしたら、夫と子供たち、交わりを赦された人々とともに生きるために、知恵と工夫をして生きる「使命感」を持つことです。

⇒神信仰は、キリストの神信仰に生きることで、自分の才覚の優秀さに依存しないことです。

⇒**神に対して生きる**とは、罪の死の求めではなく、**神の恵みの中に**生きることなのです。

結論；

- ◇1:17節；神は、その信仰を義とされます。
- ◇神の「義」は、神の前にその罪を告白した罪人に与えられます。それが、神の恵みです。
- ◇ローマ書は、神による人間の罪からの救いが、どのようにもたらされるのかを使徒パウロが語っている書簡です。
- ◇ローマ書6章1～11節は、ローマ書5章20節の「塚本訳 律法は、過ちを増し強めるために第二義的に来たのである。しかし(神に感謝する、人の犯す)罪が増し強まれば、恩恵は豊かにあふれる」の誤解を解くために書かれた箇所とされています。
- ⇒パウロは、「洗礼」を実例にして、「(神に感謝する、人の犯す)罪が増し強まれば、恩恵は豊かにあふれる」を誤解して、「神の恵みが増益するのであれば、罪を犯しつづけよう」と、主張する人々の生き方を防ごうとしました。
- ⇒「神の義」に神信仰によって与えることは、「キリスト・イエス様の死と復活」に与って、「キリストと一つにされる」ことになるので、「罪」を犯しつづける生き方へ逆戻りできない。

- ⇒神信仰により、神の**約束のみことば**に生きる人々に、「**義といのち**」が与えられるのです。
- ⇒その意味で、**朝ごと、主日ごと**に、神の約束のことば、特に「**神の命令と約束**」のことばに**信仰の祈り**をもって向かいたいと願います。
- ⇒罪の支配のもとにとどまらないで、キリストのいのち、主イエス様が失われたザイカイを愛してくださった「**神の聖なる思い・使命**」に全力で生きることが、本質的な「**神の聖化**」の道・人生であり、**神の義の道の延長**です。
- ⇒鋤に手をかけた者は、後ろを振り向かない！
- ⇒「**神の恵み**」の中に生きることが、「**キリスト・イエス様の死と復活**」に合された生き方ですから自分を責めて苦しめる必要はないのです。誰とも神信仰を比較する必要はない。
- ⇒パウロも、「**神の律法**」は、「**神の愛の律法**」であることを知り尽くしていたのですから、**神に対して前向きに生きたい**と願います。
- ⇒何よりも、**神の御子**を信じて、**神の義**に与り、「**キリスト・イエス様の死と復活**」の恵みの中にあることの確信をもち、**神信仰・神礼拝・神讚美**に喜びと感謝を抱いて生きることです。